

●二人で味わう古典和歌(49)

はるばると野中のなかに見ゆる忘れ水たえまたえまをなげくころかな

大和宣旨

『後拾遺和歌集』「恋」の一首。

「はるばると野中に見え隠れする忘れ水のように絶え間がちのあなた。あなたがいらつしやらないその絶え間絶え間を嘆いています」。

仕掛けが多くてすぐにはわかりづらい古典和歌のなかで、こんな素直な歌に出会うとほっとする。

「忘れ水」は、野中や茂みの下などを絶え絶えに流れてゆく水のこと。しかし説明がなくても、おのずからイメージが浮かぶ。辞書を覗いてみると、「忘れ水」に類似する「忘れ井」「忘れ潮」、季節外れのニュアンスをもつ「忘れ花」「忘れ音ね」(鳥の音)、よく知る「忘れ形見」、また「忘れ扇」(秋になって忘れられた扇)「忘れ貝」(二枚貝の離れ離れの一片)など、忘れシリーズいろいろ。

冒頭の歌は、嘆きの歌でありながら「はるばると野中に

見ゆる忘れ水」という序詞の、どこかなつかしく、ゆったりとしたひびきが快い。

こんなやさしい歌の作者・大和宣旨やまとのせんじはどんな女性かしらと思うと、驚くことに前回(第47回)わたしが紹介した藤原道雅の元の妻である。前斎宮・当子内親王との悲恋で世の中を騒がせ、「荒三位こうさんみ」と呼ばれるほどの荒くれ者として伝わる、あの道雅。

宣旨は、中納言・平惟仲よしかげの娘。道雅との間に二子をもうけたが夫を捨て、三条天皇の中宮・妍子けんしの女房となった。大和宣旨と呼ばれるのは、やまとうのなまきと再婚したためという。ところが、この歌の相手は詞書によれば藤原定頼定頼といえ、藤原公任ふじはらこうとうの息子。色好みの貴公子と言われた人である。彼は、妍子の権亮ごんのすけ(中宮のお世話役)であった。宣旨もまた、なかなかの恋多き女性なのである。

道雅の前回の歌と、元妻・宣旨もとつまのこの歌が同じ『後拾遺集』「恋三」にあるのを見ると、確かに生きて恋をして歌を詠んだ二人の存在とその人生とが、思いのほか生々なまなましく感じられて興味深い。

(小島ゆかり)

